



# 蒲生氏郷

がも う じ さと

郷士の偉人を知る

3



松阪市教育委員会

## はじめに

わたしたちの松阪市からは、  
たくさんのお偉人いじんが生まれています。  
松阪市の発展はってんにつくし、  
人々のために努力をおしまなかつた  
偉人の生き方から、  
多くのことを学んでいきましょう。  
偉人の学習を進めることで、  
ふるさと松阪を愛する心を大切にしましょう。  
そして、松阪が生んだ偉人のように、  
ゆめや希望を持って、  
未来へ羽ばたく人になってください。

## 目次

一、戦乱 <small>せんらん</small> の世に生きる	1
二、氏郷 <small>うじさと</small> の城下町 <small>じょうかまち</small> づくり	7
三、九十二万石 <small>こく</small> の大名 <small>だいまやう</small>	12
四、文化を愛した氏郷	17
氏郷さん年表	22
氏郷さんなんでも質問箱	23
松阪市市街図	25
松坂城復元図	26

※年れいのあらわし方について

この冊子せしでは、年れいは数え年であらわしています。  
数え年とは、生まれた年を一才として、新年が来るたびに  
一才ずつ加えて年れいを数えたものです。

氏郷さんキャラクター「がもつち」

発案者 天白小学校6年 斎藤 里緒さん  
命名者 香肌小学校5年 森本 賢太さん



# 一、戦乱の世に生きる

松坂を代表する祭りの一つである氏郷まつりは、戦国時代の武将である蒲生氏郷の功績をたたえて、毎年十一月三日に行われています。氏郷は、私たちの住む城下町「松坂」と松坂城を築いた人ですが、どのような人物だったのでしょうか。

## 1 少年時代

氏郷は、一五五六年に現在の滋賀県日野町にあった中野城の城主蒲生賢秀の子として生まれました。氏郷が生まれた時代は、織田信長や豊臣秀吉が天下統一をめざした、まさに戦乱の時代であり、氏郷もやがてその戦乱のうずまきこまれていく



蒲生氏郷画像  
(福島県西会津町西光寺所蔵 福島県立博物館提供)



氏郷産湯の井戸 (滋賀県日野町)

### 戦国時代

十五世紀末から十六世紀末にかけて、さむらいが領地を争って、いく度も戦をくり返した時代。

### 功績

すぐれた働きや成果。

### 中野城

日野城ともいう。

### 織田信長

尾張国(愛知県名古屋)に生まれた戦国武将。

### 豊臣秀吉

尾張国(愛知県名古屋)に生まれた戦国武将。

ことになるのです。

一五六八年、父賢秀が織田信長に従うことを決めたため、十三才だった氏郷が信長の住む岐阜城に人質として送られました。当時、岐阜城には他にも氏郷と同じように連れてこられた子どもたちが、小姓として信長の近くで仕えていました。かれらは、将来、織田家に仕えるすぐれた武将になるよう、武芸や兵法、文芸などのはば広い教育を受けました。

氏郷は、たくさんいた小姓の中でも特に武将としての才能にあふれており、信長は一目でそのただならぬ才能を見ぬいたそうです。小姓たちの教育係であった稲葉一鉄も信長に、「蒲生の息子は、将来、すぐれた武将になるでしょう。」と伝えたといわれています。

翌年の五月、信長は十四才の氏郷を元服させ、自らが烏帽子親となり、忠三郎 賦秀と名乗らせました。忠三郎の「忠」の字は、信長の官職名であった「弾正忠」から一字をあたえたものでした。



織田信長画像 (神戸市立博物館所蔵)

**小姓**  
昔、身分の高い人に仕えた少年。

**武芸**  
剣、弓、馬など武道に関する技芸。

**兵法**  
軍の使い方や戦の方法。

**文芸**  
学問と芸術。

**元服**  
男子が成人になるための儀式。

**烏帽子親**  
元服の時、成人した人に、烏帽子というぼうしをかぶせる人。

**賦秀**  
「やすひで」と読むともいわれている。

**官職名**  
公の仕事の役目を表す役職名。

## 2

## 大河内城の戦い

その年の八月、信長は伊勢国を支配していた北畠具教・具房の親子と戦いました。具教・具房は、織田軍との決戦を前にして、本城である霧山城から遠くはなれた大河内城に一万あまりの兵を集め、この城に立てこもる作戦をとりました。これに対して、五万人とも七万人ともいわれる織田軍は、阪内川をへだてた桂瀬側に本陣をかまえました。桂瀬町の茶臼山に連なる尾根の一角に「信長の腰掛け石」といわれる大きな石があり、信長がこの石にすわって、大河内城をにらみつけたという伝説が残っています。

両軍はいく度もはげしい戦いをくり返すものの、なかなか決着がつきませんでした。そして、五十日以上にもおよび戦のすえ、信長の次男である茶筌丸が北畠具房の養子になることで和議が成立し、大河内城は開城されました。

氏郷も、信長のすすめで父賢秀とともにこの戦に出陣しました。これが氏郷にとって初めての戦となりました。このとき、氏郷は家臣たちが止めるのも聞かずに、



大河内城跡（松本市大河内町）

**本城**  
領土を支配している武将が、本拠地としている城。

**霧山城**  
いまの津市美杉町にあった城。

**本陣**  
大将がいて、戦の命令を出すところ。

**茶筌丸**  
後の織田信雄。一五八〇年に松ヶ島城を築いた。

**和議**  
仲直りの相談。

**出陣**  
戦に参加すること。



氏郷初陣の甲冑（滋賀県日野町信楽院所蔵）

いくつもの戦に出陣して、活やくしました。

### 3 松ヶ島城へ

一五八二年、信長が京都の本能寺で明智光秀に討たれたときには、氏郷はすぐさま信長の家族を安土城から中野城にむかえ入れ、光秀からかくまいました。そ

たった一人で敵陣の真ただ中にきりこみ、敵を討ち取って帰ったといわれています。わずか十四才の少年の手がらを聞いて、信長はやはり自分の目にまちがいはなかったと大変喜んだそうです。

大河内城の戦いの手がらをみとめた信長は、その直後、氏郷を自分の娘である冬姫と結婚させました。織田一族となった氏郷は、人質生活をとかれて冬姫とともに日野へ帰ることをゆるされました。中野城に帰った氏郷は、その後も父賢秀とともに

#### 明智光秀

織田信長に従った武将であったが、本能寺にいた信長をせめ、討ち取った。その後、秀吉によって討たれた。

#### 安土城

滋賀県近江八幡市にあった信長が築いた城。



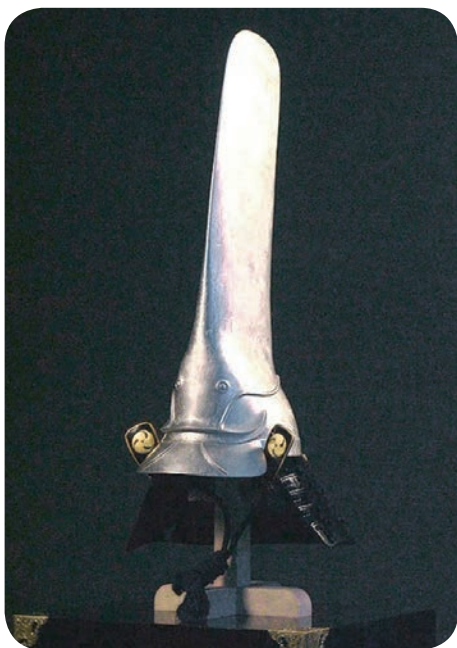
豊臣秀吉画像  
とよとみ ほうこく てんしゆかく きたく  
 (大阪市・豊國神社所蔵 大阪城天守閣寄託)

びとして、今の松阪をふくむ地域ちいぎで十二万三千石※こくという領地をあたえられ、松ヶ島城の城主となります。これは、日野の領地の実に二倍にあたる広さになります。

同じ年の九月十五日、松ヶ島城の北西にある戸木城へき(津市)の木造軍こつくりと戦っていた氏郷は、敵軍からの「月見の宴えんをするので今夜は休戦きゆうせんを願ねがいたい」という申し出を受けました。そこで、氏郷も松ヶ島城で月見の宴を開いていると、とつぜん、木造軍がせめこんできたのです。不意ふいをつかれた氏郷でしたが、愛用あいようの銀※なますの鯰尾おの兜かぶとをかぶって、勇敢ゆうかんに先頭せんとうをきって斬りこ

の功績こうせきを秀吉ひでよしらにみとめられた氏郷は、領地りょうちを増ふやされ、秀吉したがに従したがうことになりました。

この二年後の一五八四年、数々の戦かずかずでの功績を秀吉にみとめられた氏郷は、そのほう



復元ふくげんされた鯰尾の兜  
 (松阪市所蔵)

### 石いし

米などの量を表した単位。一石の米は、およそ一五〇キログラム。

### 月見の宴

月を見ながら、酒をのんだり、料理を食べたりして楽しむこと。

### 鯰尾の兜

鯰の顔をかたどった兜。

んでいきました。木造軍が鉄砲でうちかけても、氏郷はひるむことなく、木造軍の兵を討ち取っていきました。この戦いの後、城に帰ってきた氏郷の兜には、三発の鉄砲弾が当たっていたという事です。やがて、木造軍との戦いが終わり、ようやく松ヶ島城周辺は、落ち着きを取りもどしました。

松ヶ島城は五層の天守を持った城で、北に広がる海を利用した平城でした。城下町には伊勢街道が通っていて、軍事・交通・経済の要所でしたが、城の面積がせまく、海が遠浅であったために大きな船の出入りができませんでした。また、一五八五年に、この辺りで大きな地しんがあり、城や城下町は大きな被害を受けました。そこで氏郷は、新たな城と城下町の建設を計画し、松ヶ島城の南約四キロメートルの小高い丘である四五百森を選んで、築城を進めていきました。



松ヶ島城跡（松阪市松ヶ島町）

**天守**

城の中央に一段高くつくったやぐら。

**平城**

平らな土地に築いた城。

**伊勢街道**

四日市の日永から伊勢神宮まで続く道。



## 二、氏郷の城下町づくり

### 1 松阪開府の祖



空から見た松坂城跡中心部

蒲生氏郷は、新しい城をつくる場所を選んだ「四五百森」という丘を、北と南の

二つに分けました。北側には石垣を築いて、天守ややぐらなどを建て、南側には城の守り神となる神社をつくりました。そして、城のまわりには堀をつくりました。

新しい城づくりには、多くの資材や人手が必要でした。新しい城の瓦は、松ヶ島城の瓦の一部を再利用したといわれています。石材には、阪内川の河原石の他に、古墳時代の石棺なども使われました。また、朝田寺（松阪市朝田町）や神麻績機殿神社（松



天守台に使われた石棺のふた

#### 資材

何かをつくるための材料。

#### 古墳時代

古墳と呼ばれる墓がさかんにつくられた時代。三世紀半ばから七世紀まで。

#### 石棺

石で作ったかんおけ。

阪市井口中町いぐちなかちよう）、丹生神社にう（多気町丹生たきちよう）などから大木を伐り出したといわれています。

こうした大工事には、たくさんのうみんの農民がかり出されました。戦国の世せんごくにおける城づくりしろは、急ぐ必要があり、新しい城は、わずか三年ほどで完成しました。

一五八八年八月、氏郷うじさとはついに新しい城に入り、城下町じようかまちを「松坂」と名付けました。「松坂」の「松」の字は、常緑じようりよくの松のようにいつまでも栄えることを願って用いたとも、出身地の日野ひのにある「若松わかまつの森」からとったともいわれています。また、「坂」の字は、秀吉ひでよしがつくった都市「大坂」の一字をもらったといわれています。こうして「松坂」という町が誕生たんじようしました。このことから、氏郷は、「松阪開府の祖そ」と呼ばれています。

## 2 氏郷の町づくり

氏郷は、城づくりとともに、城のまわりに広がる平野を利用して、城下町づくり



松阪開府之碑のひ（松坂城跡あと）

### 常緑

冬でも葉が落ちず、一年中緑色であること。

### 若松の森

馬見岡うまみおか綿向神社むんむかみにあった松林。

### 「松坂」

一八八九年に、「松阪」とあらためられた。



ノコギリの歯のような家並み（本町矢下小路）

を進めました。城のすぐ近くを武士の住む町（殿町）とし、そのまわりを町人の住む町にしました。さらにその外側には、神社や寺などを置いて、敵が攻めてきたときの守りの拠点としました。この時に、松ヶ島城下から移された神社や寺が、今でも残っています。

氏郷は、海の近くを通っていた伊勢街道を、三渡川のあたりから、松坂の城下町を通るように移動させました。そして、伊勢街道と平行になるように職人町通りと魚町通りを整備しました。この他にも、松坂城正面の大手通りや、日野町を起点とした新町通り（のちの和歌山街道）を整備しました。そして、これらの大きな道を「小路」と呼ばれるはばのせまい道でつなぎました。

こうした道ぞいの家々は、敵から攻められにくくするため、ノコギリの歯のように建てられたといわれています。また氏郷は、住民の生活を考えた「背割排水」という

「伊勢の松坂いつ着（来）てみても、襷（飛驒守）氏郷」のとりよで襤（町）悪し」

※襷はかまの折り目、襤はかまの股の部分の布のこと。江戸時代に、「松坂の町はいつ来ても、ひだのようにギザギザで家並みが悪いなあ。」と冗談まじりに詠われたもの。

**町人**  
商人や職人。

**拠点**  
活動をすすめるための足場となる地点。

**神社や寺**  
御厨神社、正円寺、養泉寺、常念寺、龍華寺、清光寺、弥勒院、来迎寺、樹敬寺など。

**伊勢街道**  
四日市の日永から伊勢神宮まで続く道。

**和歌山街道**  
和歌山と松阪をむすんだ道。

**背割排水**  
背割下水ともいう。



きゅうお つせいざ えもんけ ほんまち  
旧小津清左衛門家（本町）

下水道を整備し、町の境としました。背割排水は、今も町の人びとのくらしを支えています。

このようにしてつくられた城下町は、江戸時代には東西が約二・五キロメートル、南北が約一キロメートルの広さになりました。松阪の町は、氏郷が松坂城を築いてから四百年以上たった今でも、いたるところに、当時の様子を伝えるものが残っています。

### 3 商人の町へ

岐阜や安土で織田信長の町づくりを見た氏郷は、松阪でも商業を盛んにするための取り組みをおこないました。松坂城に入って三か月後、氏郷は町の決まりとなる「町中掟」を定め、その中で「十楽」という言葉を使って、日野や松ヶ島でおこなってきた楽市楽座をさらに進めようとなりました。楽市楽座とは、税金



とのまち うおまち  
背割排水（殿町と魚町の境）

**十楽**  
もともとは、極楽で味わえる十種の喜びという意味の仏教用語。

**税金**  
油だけは例外。



旧長谷川治郎兵衛家 (魚町)



三井家発祥地 (本町)

をはらわずに、だれでも自由に商売ができるようにした制度です。

この他にも、けんかや※こうろん口論を禁止きんししたり、町中で刀を抜くことを禁止したりするなどの決まりがありました。これらの決まりは、町人を保護しようとした氏郷の考えがあらわれていて、当時としては※かつきてき画期的なものでした。

さらに氏郷は、松ヶ島に住んでいた町人を町ごと移動させ、本町、なかつまち中町、魚町な

どに住まわせました。こうした町の名前は、いまでも松阪の町に残っています。また、城下町の商工業をはってん発展させるために、日野や伊勢大湊いせおおみなと(伊勢市)から有力な商人を招きました。氏郷の呼びかけに応じて日野から移ってきた商人が日野町ひのまちをつくり、伊勢大湊から移ってきた商人が湊町みなとをつくりました。

このような氏郷の町づくりにより、松阪にはたくさんの人々が集まり、江戸時代には、三井家、はせがわ長谷川家、小津家など、多くの※ごうしょう豪商が活やくしました。氏郷は、後に「商人のまち」と呼ばれる松阪の※いしすえ礎を築いたのです。



町名が書かれた地名標柱 (湊町)

口論  
口で言い争うこと。

画期的  
新しい時代をひらくようす。

豪商  
多くの富を持った商人。

礎  
基礎、土台。

# 三、九十二万石の大名

## 1 会津時代の氏郷

松坂城を築き、城下町がようやく栄え始めたときに、蒲生氏郷は松坂をはなれることになりました。

一五九〇年、天下統一をめざす豊臣秀吉は、奥羽をおさめるため、氏郷に会津へ行くように命じました。会津は、秀吉に従うことを最後までためらった伊達政宗がいた地でした。秀吉は、奥羽全体をおさめるための中心となる会津の地を、氏郷にまかせたのです。

氏郷の石高は、十二万三千石から四十二万石に大きく増えました。しかし、松坂をはなれることは、氏郷にとってつらいことでした。



地図 氏郷ゆかりの地

**豊臣秀吉**  
尾張国(愛知県名古屋市)に生まれた戦国武将。

**奥羽**  
今の東北地方。

**会津**  
今の福島県会津若松市一帯。

**伊達政宗**  
出羽国米沢(山形県米沢市)で生まれた戦国武将。

**石高**  
その土地でとれる米の重さを表したもの。一石はおよそ一五〇キログラム。一万石以上の石高を持つものを「大名」といった。



氏郷木像（会津若松市興徳寺所蔵）

氏郷が涙を流しているのを見た人が「それは感激の涙か。」とたずねたところ、氏郷は「小さい国でも、都（京都）が近ければ将来ののぞみもあるが、このような都から遠い地ではのぞみはかなわない。」と語ったといわれています。

それでも氏郷は、会津という新たな地で、自分の力を発揮していきました。奥羽は、秀吉に不満を持つ大名が反乱を起すなど、まだ不安定な状況でした。しかし、氏郷はわずか一年あまりで奥羽全体を平定し、七十三万四千石の石高になりました。

氏郷の軍は、とても強かったといわれています。氏郷は、家臣たちに軍の決まりをきびしく守らせました。氏郷の軍の様子を見た人は、「氏郷の軍の中には、決まりをやぶる者は一人もいない。氏郷はただものではない。」と言ったそうです。

その一方で、氏郷は家臣に対してやさしい面も持ちあわせていました。氏郷は、知人にあて



伊達政宗画像（仙台市博物館所蔵）

家臣  
その家に仕える人。



氏郷当時の若松城（想定図）

た手紙の中で、家臣をまとめるために大切なことについて、「家臣には、※ちぎょう知行をあたえるだけでなく、※なさ情けをかけねばならない。知行と情けはどちらも大切である。」と書いています。このような氏郷うじぎょうだったからこそ、多くの家臣をまとめることができたのでしょう。

その後、氏郷は

会津で、城の大改修※と城下町じょうかまちづくりに力をそそぎました。氏郷は、当時会津にあった黒川城くろかわじょうを改修し、城下町を「若松わかまつ」と名付けました。若松城は、「鶴ヶ城つるが」とも呼ばれますが、これは氏郷の幼名※ようみやう「鶴千代つるちよ」にちなむといわれています。また、氏郷は城下町の整備とともに、松阪や日野から商人を呼びよせて産業をさかんにし、会津の発展はってんの基礎きそを築きました。

城づくり、町づくりの名人であった氏郷は、会津で



現在の若松城の天守と石垣てんしゅ いしがき

### 知行

手柄をたてた武士に、ほうびとして与える土地。

### 情け

思いやり、愛情。

### 改修

よくするためになおすこと。

### 幼名

小さい頃の名前。

### 産業

生活に必要なさまざまなものを生み出す仕事。



も後の世に残る大きな仕事をおこないました。若松城の<sup>※</sup>天守は新しく建てられましたが、氏郷の時代に築かれた石垣は、今もその姿を残しています。

## 2 晩年の氏郷

一五九二年、豊臣秀吉が朝鮮に兵を送るのにもない、氏郷は九州に出かけ、名護屋城の近くに陣をかまえていました。氏郷は、そのときに病気にかかり、いったん会津にもどったあと、京都にある屋敷で病気を治すことにしました。秀吉が見舞いに来たり、有名な医者が治療したりしましたが、病気はよくなりませんでした。

このころ、氏郷は九十二万石の大名となっていました。九十二万石というのは、秀吉をのぞけば、徳川家康、毛利輝元に次いで、全国で三番目に多い石高でした。会津でも、立派な城と城下町を築いた氏郷でしたが、新しい城で、自ら政治をおこなうことはかありませんでした。そして、一五九五年二月七日、氏郷は、家族や



地図 名護屋城の位置

**天守**  
城の中央に、一段高くつくとやぐら。

**朝鮮**  
いまの大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国があるところ。

**名護屋城**  
佐賀県唐津市にあった城。

**陣**  
戦のために、軍隊を集めた場所。

**徳川家康**  
三河国岡崎(愛知県岡崎市)に生まれた戦国武将。

**毛利輝元**  
安芸国吉田郡山(広島県安芸高田市)に生まれた戦国武将。

家臣に見守られながら、四十才という若さで亡くなりました。

「限りあれば 吹かねど花は 散るものを 心みじかき 春の山風」

※花の命には限りがあり、風など吹かなくても、いつかは散るというのに、いそいで散らそうとする春の山風をつれないことだ。

氏郷は、このような辞世の和歌を詠んでいます。氏郷のお墓は、亡くなった京都の他にも、日野、松阪、会津にあります。亡くなってから四百年以上たった今でも、「氏郷まつり」などの行事がおこなわれ、たくさんの方が氏郷をしのんでいます。また、日野、松阪、会津には、「蒲生氏郷公顕彰会」があり、氏郷の功績を顕彰し、お互いに交流を深めています。



氏郷の墓（京都市黄梅院）



松阪市の氏郷まつり

**辞世の和歌**  
この世を去るときによむ和歌。

**しのぶ**

むかしの人を思い出し、なつかしむこと。

**氏郷公**

「公」は敬称。

**顕彰**

功績などを広く知らせること。

## 四、文化を愛した氏郷うじさと

### 1 氏郷と茶ちやの湯ゆ

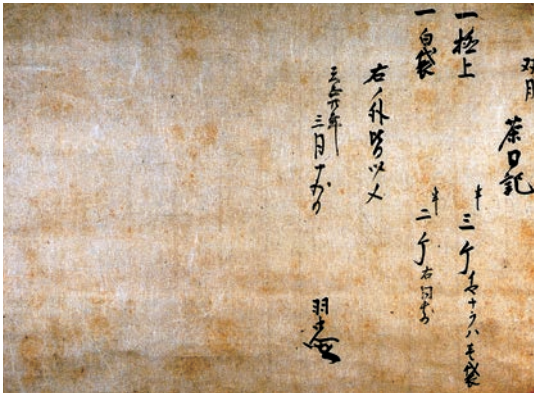
蒲生がもう氏郷は、勇ましく戦う武将ぶしやうであっただけでなく、文化を愛した人でもありました。その一つが「茶の湯」です。

当時の武将にとって、茶の湯は重要なたしなみの一つでした。

茶の湯には、さまざまなお道具が使われますが、氏郷は、「竹茶杓たけちやしゃく」や「竹花入たけはないれ」などの道具を自分で作りました。今に伝わるこれらの道具からは、武将としての力強さが伝わってくるようです。

この他にも、「蒲生氏郷茶日記ちやにっき」という、氏郷が書いた茶の注文書が松阪に残っています。

氏郷は、どのようにして茶の湯と出会ったのでしょうか。



「蒲生氏郷茶日記」(松阪市所蔵)



氏郷作の竹花入  
(東京・根津美術館所蔵)



氏郷作の竹茶杓  
(東京国立博物館所蔵)

#### 茶の湯

客をまねぎ、抹茶まっちゃをたてて楽しむこと。

#### たしなみ

けいこなどの心得。芸事げいごなどの心得。

#### 茶杓

抹茶まっちゃをすくって茶わんに入れるためのさじ。

#### 花入

茶の湯のときに、花を入れてかざるためのもの。

## 2

## 氏郷と千利休

十三才のときに、※おだのぶなが織田信長ひとじちの人質となった氏郷は、ぶげい武芸だけでなく茶の湯や和歌など、はば広い教育を受けていました。やがて、当時天下一の※ちやじん茶人となる千利休※とも深くかかわりました。

氏郷と利休の出会い、利休が信長の※さどう茶頭となった一五七五年ごろといわれています。このとき、利休は五十四才、氏郷は二十才でした。ねんれい年齢ははなれていましたが、二人はいっしょに※茶会を開いたり、手紙のやりとりをしたりしていました。利休から氏郷へ送られた手紙では、茶の湯についてのことや、松坂城じょうが完成した



千利休画像 (おもてせん け ふ しん あん し ょ ぞ う 表千家不審菴所蔵)

ことへのお祝いの言葉などが書かれています。利休が氏郷のことを、「※ひ飛もじ」とあだ名で呼んでいることから、二人が親しい仲だったことがわかります。

利休には、たくさんでしの弟子がいましたが、弟子の中でもとくに有名な弟子たちのことを

**織田信長**  
尾張国おわりのくに（愛知県名古屋）に生まれた戦国武将。

**茶人**  
茶の湯を好む人。

**千利休**  
大坂の堺さかいで商人の家に生まれる。織田信長、豊臣秀吉に仕え、極限までむだを省く「わび茶」の完成に努めた。

**茶頭**  
將軍や大名に仕え、茶の湯についてのことを担当する責任者。

**茶会**  
茶の湯の会。

**飛もじ**  
氏郷が飛騨守ひだのかみという官位をあたられていたことからついたあだ名。

「利休七哲」<sup>りきゅうしちてつ</sup>と呼びます。これは、江戸時代<sup>えど</sup>になってからいわれたことですが、氏郷は七人の中の一番目に挙げられています。

### 3 千家<sup>せんけ</sup>の大恩人

信長の死後、<sup>※とよとみひでよし</sup>豊臣秀吉の茶頭となっていた千利

休は、秀吉の怒り<sup>いか</sup>にふれて、

一五九一年に、<sup>※せつぷく</sup>切腹を命じられます。

その当時、利休には二人の息子がいました。

利休が死んだ後、氏郷は、次男の千少庵<sup>せんしょうあん</sup>を<sup>※</sup>会津

に預かりました。若松城<sup>わかまつじょう</sup>には、氏郷が少庵の

ために造ったといわれる茶室「麟閣<sup>りんかく</sup>」が残され

ています。三年後、少庵は秀吉にゆるされて、

京都にもどることができました。



茶室「麟閣」(若松城内)



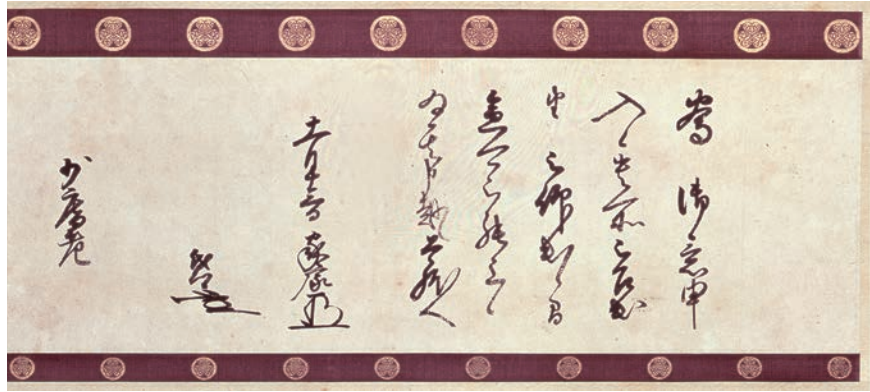
千少庵画像 (表千家不審菴所蔵)

**千家**  
千利休から始まる、茶の湯の流派の家。

**豊臣秀吉**  
尾張国(愛知県名古屋)に生まれた戦国武将。

**切腹**  
自分の腹を切って死ぬこと。

**会津**  
いまの福島県会津若松市一帯。



(秀吉様の) お考えとして申し入れます。あなたを召し出されるとのことですので、急いで京都に上つてくださいます。そのことを申し伝えます。

十一月十三日

家康(花押)

氏郷(花押)

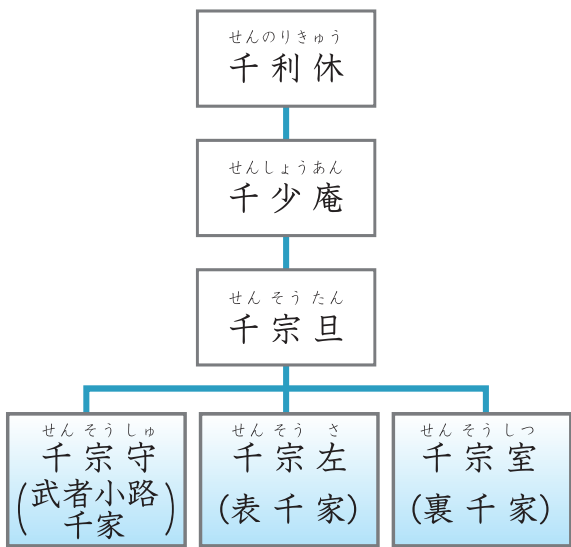
少庵老

少庵召出状 (表千家 不審菴所蔵)

このとき、少庵をゆるすように、秀吉にたのんだのが氏郷と徳川家康でした。氏郷と家康が、少庵に「京都へもどるよ うに」と伝えた手紙が残っています。この手紙は「少庵召出状」と呼ばれ、今でも千家の家宝として大切にされています。

その後、少庵の孫たちが表千家・裏千家・武者小路千家とい う三つの流派をおこしました。これらは、現在

でも続いており、「三千家」と呼ばれています。もし、氏郷が少庵を助けていなければ、現在の三つの千家は存在しなかったかもしれません。



三千家の家系図

**徳川家康**  
三河国岡崎(愛知県岡崎市)に生まれた戦国武将。

**少庵老**  
「老」は敬称。

**家宝**  
その家に伝わる宝物。

**花押**  
自分のサインの代わりに使用した記号。

**流派**  
立場ややり方のちがいによって分かれたもの。

松坂城跡の表門跡の正面にある、「松坂城跡」と書かれた石碑には、裏千家の第十五代家元千宗室の字が刻まれています。

「蒲生氏郷公開府

松坂城跡

鵬雲斎 千宗室（花押）」

家元は、松阪でおこなった講演の中で、「氏郷公は千家の大恩人です。氏郷公がおられなかったら、千家も千家の茶道も現在のようになっているとはおられません。」と話されました。

この石碑は、今も城を訪れる人々を迎えています。石碑の文字や家元の言葉から、文化を愛し、人とのつながりを大切にした氏郷の生き様を、うかがい知ることができます。



「松坂城跡」の石碑

「松坂城跡」の石碑  
一九七八年に建てられた。

家元

その流派をつぐ家の主。裏千家の家元は、千宗室を名乗った。

鵬雲斎

本名とは別に名乗った「号」と呼ばれるもの。

氏郷公

「公」は敬称。

茶道

お茶をたてる作法。「さどつ」とも読む。

生き様

生きていく上での態度、ありさま。

※松坂城の表記

石碑が建てられたときは、三重県指定史跡「松坂城跡」でしたが、二〇一一年に国指定史跡となるときに「松坂城跡」の表記になりました。

# うじさと 氏郷 さん 年表

西暦	年齢	おもなできごと
一五五六年	1	近江国（今の滋賀県）中野城（日野城）で生まれる
一五六八年	13	人質として織田信長の岐阜城に入る
一五六九年	14	元服して忠三郎賦秀と名乗る 大河内城の戦いで初陣をかざる 信長の娘冬姫と結婚し、中野城へもどる
一五八二年	27	本能寺の変の直後、信長の家族を中野城でかくまう
一五八四年	29	松ヶ島城へ移り、十二万三千石を与えられる
一五八五年	30	大坂でキシタンの洗礼を受け、レオンと名乗る
一五八六年	32	豊臣秀吉から、羽柴の姓を与えられる
一五八八年	33	松ヶ島から四五百森へ城を移し、城下町を「松坂」と名付ける 城下町へ「町中掟」十二か条を出す
一五九〇年	35	会津（今の福島県）へ四十二万石で移される
一五九一年	36	東北地方を平定し、七十三万四千石になる 千利休の次男少庵を会津で預かる
一五九三年	38	九州の名護屋（今の佐賀県）で病気になる、京都に帰る
一五九四年	39	領地の検地を行い、九十二万石になる
一五九五年	40	二月七日、京都で亡くなる

氏郷さんのお墓は、京都の大徳寺黄梅院にあります。このお墓からは、遺骨（亡くなった人の骨）とともに太刀（刀の種類の一つ）が見つかりました。

このほかにも、日野の信楽院、松阪の龍泉寺、会津の興徳寺にもお墓があります。



信楽院のお墓（滋賀県日野町）



龍泉寺のお墓（松阪市愛宕町）



興徳寺のお墓（会津若松市）



# うじさと 氏郷さんでもん質問箱

**Q** 氏郷さんには、いろいろな名前があったのですか。

**A** 小さいころは、「鶴千代」とよばれていました。十四才で元服して、「忠三郎賦秀」と名乗りました。そして、三十才ごろに「氏郷」と改めました。

**Q** 氏郷さんは、どんな顔をしていたのですか。

**A** 会津に伝わっている顔（1ページ）は、氏郷さんの家臣だった人たちが絵師に描かせたもので、氏郷さんの顔が描かれた絵の中では、もっとも古いものです。氏郷さんの顔は、日野、松阪にも伝わっています。



松阪の顔（愛宕町龍泉寺）



日野の顔（滋賀県日野町）

**Q** 氏郷さんが築いた松坂城は、どんな城ですか。

**A** 建物は残っていませんが、自然石をそのまま積み上げた「野面積み」の石垣が最大の特徴です。氏郷が近江から呼びよせた職人たちが築きました。一八七二年に撮影された写真には、いくつかの建物が写っています。



松坂城の表正面には、このような2階だての門がありました。（東京国立博物館所蔵）

**Q** 松坂城は、どのくらいの大きさだったのですか。

**A** 石垣で囲まれた中心部分（国指定史跡）はおおよそ東京ドーム一個分、堀で囲まれた広さは、おおよそ東京ドーム六個分です。松阪市民病院、殿町中学校、松阪工業高校などは、堀の内側にありました。堀の長さは、全部合わせると

二・一キロメートルあり、幅は広い所では三十メートルくらいありました。松阪工業高校の東側から、第一小学校の前を通って、市役所の方へ流れる神道川は堀の名残です。



第一小学校近くの堀あと



松阪工業高校近くの堀あと

**Q** 松坂城のほかに、氏郷さんがつくったものは残っていますか。

**A** 氏郷さんは、「背割排水（背割下水）」という下水路を町の境につくりました。本町の産業振興センター・駐車場の南側や魚町の旧長谷川治郎兵衛家などに残っています。



旧長谷川治郎兵衛家にある背割排水

氏郷さんと結婚した冬姫さんは、どんな人でしたか。

氏郷さんが十四才、信長の娘の冬姫さんが九才のときに結婚しました。二人はとも仲が良かったそうです。氏郷さんが四十才で亡くなった後、出家（仏の道に入ること）して尼僧となり、八十一才で亡くなりました。



冬姫さんのお墓（京都市知恩寺）

氏郷さんは、キリスト教徒だったのですか。

氏郷さんが松ヶ島に来たころに、親友の高山右近のすすめによって、キリスト教徒になったといわれています。「大坂」で洗礼を受け、レオンという名をもっています。

※洗礼…キリスト教徒になるための儀式

氏郷さんは、どんな病気で亡くなったのですか。

当時のお医者さんが書いた記録から、ガンだったのではないかと考えられています。四十才の若さでした。

松阪では、毎年秋に氏郷まつりが行われていますが、ほかの場所でも行われていますか。

氏郷さんのふるさとである日野では、夏と秋の二回行われています。会津では、九月に行われる会津まつりの武者行列に氏郷さんが登場しています。氏郷さんにゆかりのある松阪と日野と会津は、おたがいのまつりに参加するなどして、交流を深めています。



会津まつりの様子（福島県会津若松市）



## みんながかいた 氏郷さん



天白小学校6年 稲垣佑里さん



柿野小学校6年 梅本るなさん



天白小学校6年 加藤虹郎さん



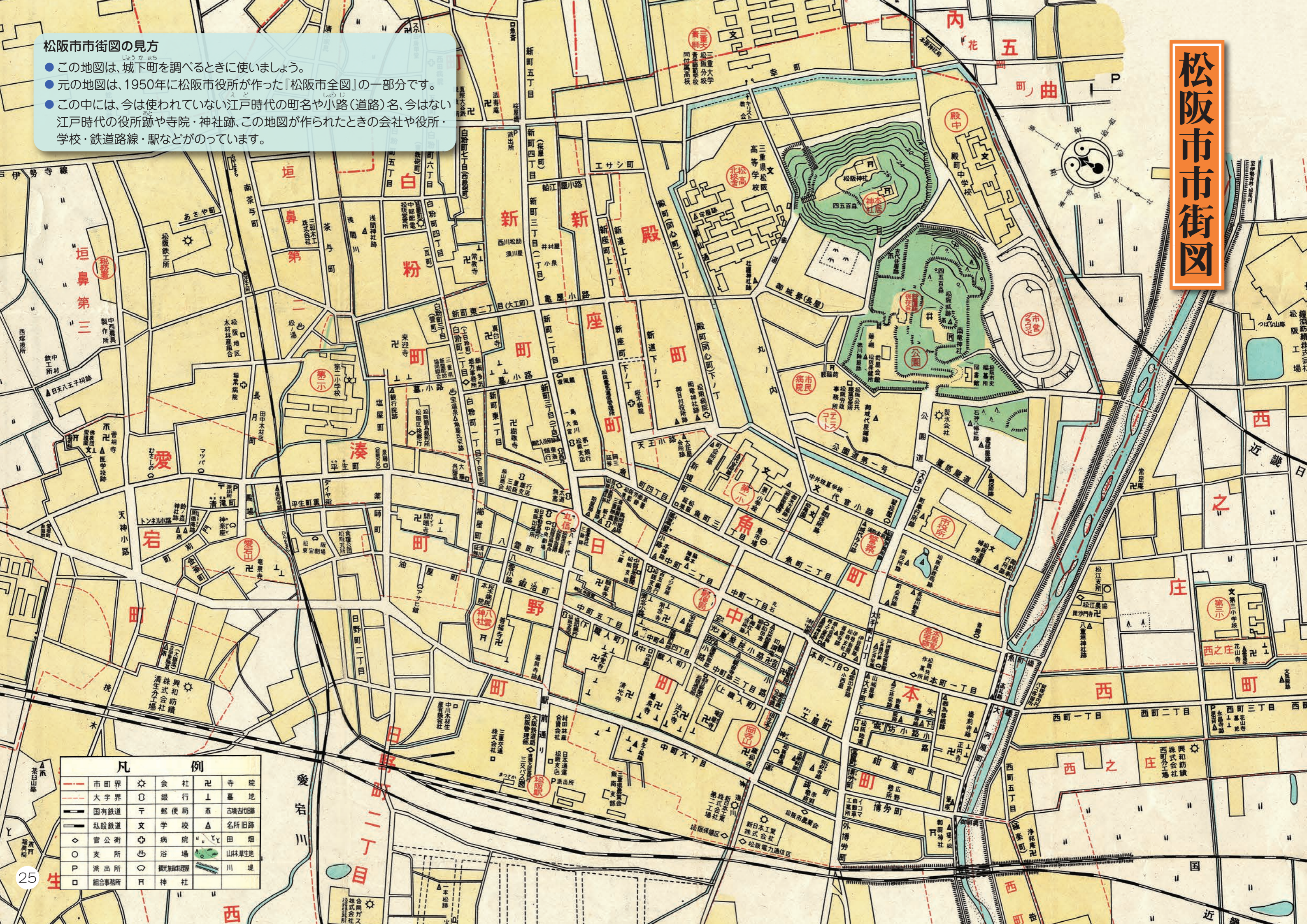
幸小学校6年 辻 圭汰さん



天白小学校6年 後藤もえさん

# 松阪市市街図

**松阪市市街図の見方**  
 ●この地図は、城下町を調べるときに使いましょう。  
 ●元の地図は、1950年に松阪市役所が作った『松阪市全図』の一部です。  
 ●この中には、今は使われていない江戸時代の町名や小路(道路)名、今はない江戸時代の役所跡や寺院・神社跡、この地図が作られたときの会社や役所・学校・鉄道路線・駅などがのっています。



凡 例	
市町界	会社
大字界	銀行
国有鉄道	郵便局
私設鉄道	学校
官公街	病院
支所	浴場
派出所	観光資料屋
組合事務所	神社
	寺院
	墓地
	古墳(古跡)
	名所旧跡
	田畑
	山林草地
	川堤

# 松坂城跡を調べてみよう

No.	建物の跡	No.	建物の跡	No.	建物の跡
1	天守	18	藤見櫓	35	宝蔵
2	敵見櫓	19	角櫓	36	大手門(四ツ足御門)
3	多間	20	櫓(無名)	37	大手門番所
4	多間	21	櫓(無名)	38	鷹部屋
5	金ノ間櫓	22	裏門	39	両役所
6	金ノ間櫓台所	23	裏門番所	40	両役組同心屋敷
7	兵部屋敷	24	櫓(無名)	41	石神八幡宮
8	裏二ノ門(中御門)	25	二ノ丸屋形(徳川陣屋)	42	火薬蔵(硝煙蔵)
9	太鼓櫓	26	土戸御門	43	火薬蔵(硝煙蔵)
10	風呂屋	27	土戸御門番所	44	五曲口御門
11	多間	28	おもてもん表門	45	八幡宮
12	月見櫓	29	表門番所	46	牢屋
13	月見櫓台所	30	うすみごもん埋御門	47	御城番屋敷 <現存>
14	多間	31	櫓(無名)	48	米蔵 <現存>
15	遠見櫓	32	こめくら米蔵	49	からめてもんたけごもん搦手門(竹御門)
16	おもてにのもんすげざえもんごもん表二ノ門(助左衛門御門)	33	どうくら道具蔵	50	じょうだいやしきじょうだいやくしょ城代屋敷(城代役所)
17	かねのやくら鐘ノ櫓	34	道具蔵	51	うまやうまや馬屋(厩)

# 松坂城復元図



## 松坂城復元図の見方

- この資料は、松坂城跡を調べるときに使いましょう。
- この図は、松坂城の堀や土塁(土手)、松坂城内にあった建物の跡を示しています。
- 水色の部分は、城の周囲を取りまく水堀の跡、緑色の部分は堀の内側に築かれた土塁(土手)の跡です。
- 地図に書かれた51までの番号は、蒲生氏郷の時代から明治初期までの約280年間にあった建物の跡を示しています。建物があつた時期はまちまちで、同じ時期にこれらは全部あつたわけではありません。



## 編集後記

郷土の偉人に学ぶシリーズの第三冊目として、「蒲生氏郷」を取り上げました。松阪市教育ビジョンに示されている「ふるさと松阪に学ぶ教育の推進」の実現を図るための冊子になります。

松阪市の全ての子どもたちは、四年生で「本居宣長」、五年生で「松浦武四郎」、六年生でこの冊子の「蒲生氏郷」「三井高利（発刊予定）」を学びます。これらの冊子が多くの学習の場で、別冊の指導書と併せて活用されることを願っています。

急激な社会環境の変化の中で人と人との関わりが希薄になり、家族や地域社会と関わって自分を磨いたり、子どもたちが遊びあったりする機会が減少しつつあります。自分たちが育ってきた地域を大切に守っていかうとする心や、地域に貢献しようとする態度を養うことの重要性が一層高まるものと考えられます。生まれ育った郷土は、人間形成に大きな役割を果たすとともに、一生にわたる精神的支え、心のよりどころとなります。

郷土の偉人に学ぶ教育を推進することによって、郷土を愛する心の醸成を図ることは、

- ①子どもたちの豊かな心を育む
- ②地域社会の発展に貢献する意欲を喚起
- ③異なる文化や歴史を理解する態度の育成
- ④地域のことを語ることでできる人材の育成
- ⑤伝統文化の継承

といった観点からも大きな意義が認められます。

こうしたことを踏まえ、各教科、道徳、総合的な学習の時間などにおける学習活動を相互に関連づけて、地域の文化、歴史、産業、人材など、身近な教育資源を積極的に活用した郷土教育の推進を切に願います。

**一章**「戦乱の世に生きる」では、松阪開府の祖といわれる蒲生氏郷の少年期から、新しく築いた松坂城へ入城するまでを扱い、どのような人物であったかを概観しています。

**二章**の「氏郷の城下町づくり」では、「松坂」と命名し、楽市楽座、街道の整備、商人の誘致など清新で画期的な政策をもって松阪発展

の基礎を固めたことや、氏郷のまちづくりを市内に残る遺構などで紹介しています。

**三章**の「九十二万石の大名」では、会津時代の氏郷と晩年の氏郷を紹介しています。

**四章**の「文化を愛した氏郷」では、勇猛果敢な武将の面だけでなく、茶の湯を愛し、「利休七哲」と呼ばれた文化人としての側面を紹介しています。

綴り込みには、「松阪市市街図」を載せ、昔が偲ばれる町名や小路名、旧跡などを載せました。また、「松坂城復元図」は、松坂城の堀や土塁（土手）、明治期以前にあった建物の跡などもわかるようしました。これらを通じて、氏郷への理解がより深まるように願っています。

**協力してくださった方**（敬称略、五十音順）

会津若松市教育委員会文化課、赤塚利夫、愛宕山龍泉寺、裏千家今日庵、黄梅院（京都市）、大阪城天守閣、表千家不審菴、興徳寺（会津若松市）、神戸市立博物館、国立公文書館、西光寺（福島県西会津町）、滋賀県日野町教育委員会生涯学習課、信楽院（滋賀県日野町）、瑞林院（京都市）、仙台市博物館、知恩寺（京都市）、東京国立博物館、豊國神社（大阪市）、根津美術館（東京都港区）、福島県立博物館、本居宣長記念館

**郷土の偉人に学ぶ教育推進委員会**（編集委員）

門 暉代司（松阪市文化財保護審議会委員）  
松本 吉弘（松阪市立第一小学校校長）  
山本 命（松浦武四郎記念館学芸員）  
杉浦 久美（松阪市立山室山小学校教諭）  
三宅 孝史（松阪市立徳和小学校教諭）  
更屋 博史（松阪市子ども支援研究センター長期研修員）  
成瀬 佐和（松阪市教育委員会学校支援課指導主事・事務局担当）

※「松阪」の表記について

この冊子では、原則として現在より狭い地域をさす、明治期以前の松坂城下は「松坂」の字を使い、現在の松阪市を指す場合は、「松阪」の表記にしました。



蒲生氏郷 郷土の偉人を知る③

令和4(2022)年3月25日 改訂

発行 松阪市教育委員会

編集 郷土の偉人に学ぶ教育推進委員会

印刷 光出版印刷株式会社